



M class

音遊びと身体表現

「四季音

~Sounds of Four Seasons~」

指導担当 岡田 健一

遊びと表現発表会 報告書

Mクラス

【報告者】

2年生

飯田 いつみ
江口 友美
大塚 麻奈
小西 彩香
白仁田 麻希
田中 怜奈
千々岩 樹里
野田 彩夏

1年生

石橋 美咲
井手 千夏子
井手口 麻奈加
大隈 彩花
小野 綾香
片山 ありさ
川崎 歓花
小坂 大悟
中井 遼海
永野 佑奈
西口 桃子
西田 望美
日高 莉音
本田 玲奈
松永 佑華
宮田 桃華
山下 絢女

<五十音順>

【発表内容】

身近なものを使って自然の中にある音を創り、音と身体表現で日本の四季を表す。

【ねらい】

- ・巡りゆく日本の四季を感じてもらう
- ・音を聴いて、自分なりの季節を想像する
- ・身近なものを使って出す音を聴いて、子ども達もやってみたくなる（自らやりたくなる）

【内容を決めるまでの経緯】

授業内でレインスティックを作ったことがあったため、同様に身近なものだけで自然の音を再現し、その音で日本の四季を表現することをテーマとし、「ねらい」を立てた。

当初は、音だけで表現することを目標に漠然と音作りを始めようとしたが難しく、2年生8人のイメージを共有するため、初めに、春夏秋冬でイメージするものとその音を列挙してみた。春は鳥のさえずり、夏はセミや花火、秋は枯れ葉、冬は雪など、季節のイメージが出てきたので、その音をどうやって創るかを考えた。その次には、それぞれの音をどういったタイミングでどのように表現するのが課題となった。そのため、あらすじを制作し、あらすじに合わせて音を創ることにした。また、音のタイミングを合わせるために、バレエの経験がある学生が即興ダンスで表現し、それに合わせて音を鳴らすことにした。目で見た情報ではなく、音からの情報で季節をイメージすることをメインとしたかったため、ダンスはシルエットで行うこととした。

【あらすじ】

「猫が感じる四季の美しさ」をテーマに2人の学生であらすじを考えていき、そのあらすじを基に、音の制作とダンスの表現を考えていった。

「春」

猫は屋根の上で昼寝中。

近くを自転車が通ったり、鳥が飛んでいたりする。

雨が降り始め、屋根のある場所へ移動し猫は雨の音を感じる。

「夏」

漁港で魚を食べる。

花火が打ちあがり猫は驚く。

スイカを食べたり、風鈴がなったりしている。

風が強くなり雷が鳴る。台風が来るが、風は弱まり秋の風になっていく。

「秋」

落ち葉が落ち、落ち葉を掃く音がする。落ち葉を集め焚火をし、焼き芋を作る。

夕方になると虫の音が聞こえてきて、夜はお月見をする。

「冬」

雪が降り寒さを感じる。猫が雪を踏む音が聞こえる。

引き戸が開いて誰かの家に入れてもらう。こたつの中に入り、食卓からは鍋の音が聞こえる。

季節はお正月になる。

「再び春」

新しい生活に向けて、身支度の音や靴を履く音。ドアを開け出発する。

【音づくり】

全員であらすじの中にある音とその作り方について意見を出し合った。例えば、春には鳥のさえずりや羽ばたきの音、夏は漁港や花火、秋は落ち葉や焼き芋、冬は雪を踏む音や鍋の音などがイメージできたが、その音をどうやって作るかはインターネットで調べたり、実際に売られている楽器やおもちゃなどを参考に、身近なもので作れないかを考えた。

とりあえず実際に作ってみようということになり、家にあるペットボトルや空き缶、空き瓶、紙コップ、新聞紙などを持ち寄った。春、夏、秋、冬を2人ずつで担当し、素材を組み合わせて、切ったり貼り付けたりと、音を想像しながら試行錯誤してみた。

鳥の羽音や落ち葉を掃く音などは、新聞紙などですぐに作ることができたが、漁港で魚がピチピチと跳ねる音には苦戦した。スライムを手作りし、それで表現しようと試みたものの、思うような音にするのが難しかった。

その他、当初予定していたよりも音作りは難航し、試行錯誤してできた音も、それだけでは聞こえないものが多かった。マイクを使用するかどうかも検討課題だった。というものの、練習時にマイクが使用できないことや、マイクを使うことでスピーカーから音が流れるため、生で聞こえるものとマイクを使ったものでは聞こえ方が変わるのではないかという懸念があったからである。マイク使用の有無については、中間発表で助言を受けたうえで再度検討することにし、音づくりを進めた。

また後半になると、音づくりに時間がかかり、ダンスとのタイミングを合わせる練習時間の確保が難しくもなってきた。そのため、タイミングを取りやすくするために、曲に合わせてダンスや音を入れていくことに変更した。

しかし既存の曲では、せっかく制作した音の魅力が半減してしまうことから、曲は作曲し、ピアノで演奏することにした。あらすじを基に大まかなダンス構成を考え、それに合わせて場面ごとに作曲していった。場面によっては、ダンスを見ながらタイミングを計り、次に展開するようにもした。



【中間発表】

中間発表の時点では、音作りや表現方法に悩んでいる部分も多く、春の場面だけを作り、先生方から助言をいただくことにした。

中間発表では、とりあえずマイクを通さずにやってみたが、立ち位置によって聞こえ方が大きく変わった。また、ピアノの音量とのバランスも悪く、いくつかの改善点と助言をいただいた。

助言を参考に、マイクでの練習が直前までできないことから、全てを生音で表現し、立ち位置を工夫してみることにした。

【発表構成】

発表時間は 20 分であるため、こういった材料でこういった音を作ったかを 10 分間で説明し、残り 10 分間で表現することにした。最初は、説明を先にしてしまうと、視覚情報に惑わされてしまうと感じたため、説明は後半にすることにした。しかし、シルエットで行うと、どんなものを使って鳴らしているのかかえって気になるとの指摘を中間発表でいただいたため、前半に説明を行うことにした。

【音作りの工夫】

表現するにあたり、中間発表で「会場内でも鳴らしてはどうか」との助言を受け、会場内の様々なところで音を鳴らしてみた。レインスティックは、手芸店などで布が巻かれていた紙筒をいただいて作成したが、130cm ほどの長い紙筒でも、中に入った豆やビーズが落ち切ってひっくり返すと、ひっくり返した際に勢いが付き、雨と言うより波のように聞こえてしまった。そのため、より雨の音に近づけるよう会場内を歩いて移動することで、ひっくり返した時の音を目立たないように工夫した。また、会場内を歩くことで、客席は雨の中にいるような感覚を感じることができる空間となった。

この経験から、どこでどのように音を鳴らすかということも、より本物の音に近づける要素であるということに気づき、鳥の羽音やさえずりは、客席の頭上にもなる 2 階席からも鳴らすようにしてみた。

また花火は、ジェット風船や少しだけ膨らました風船、ビー玉、缶のふた、段ボールなどを使用して表現したが、パーツごとに鳴らしたり、鳴らす位置をあえて離したり近づけたりすることで花火の雰囲気表現することができた。

さらに、どうしてもピアノの音の方が大きくなる部分では、鳴り物おもちゃを作り、客席にもお手伝いいただくことで音を増やし、大きくした。

【発表 2 週間前からの追い込み】

発表の 2 週間前によく構成がまとまった。2 年生は 8 人と少ないため、今回の発表では 1 年生の協力も必要不可欠だった。しかし、1 年生と合同で練習できる日数は 2 日程度しか確保できず、実質 1 日で覚えてもらうしかない状態だった。

また、照明を入れて行うリハーサルでは、ダンスをシルエットで行うよりも、表情なども見える形で行った方が良いとの助言を受け、直前で変更することになった。

【本番】

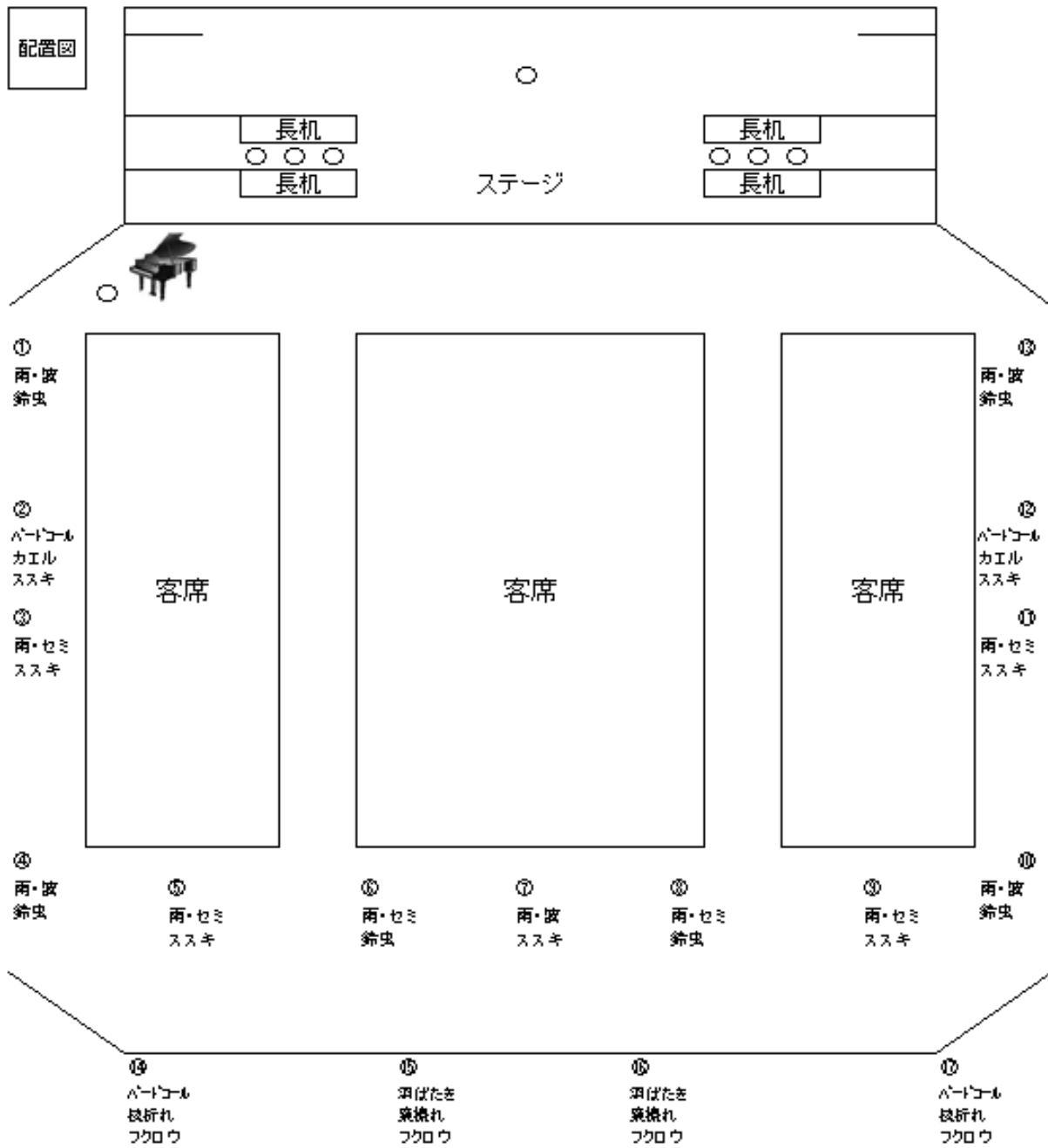
発表をより良いものにしたいと、本番直前まで衣装や説明部分の改善を行った。

本番では、1 年生、2 年生ともに心をひとつにし、また客席の協力も得て会場全体を音で包み込み、日本の巡りゆく四季を表現することができた。



	ダンス内容	背景の色	イメージ	飯田	田中	江口	野田	白仁田	小西	1階 1年(13)	2階 1年(4)
春	寝ている	ピンク	猫を起こすように			鳥	鳥				
	起きる	↓	朝をイメージして	羽ばたき	そよ風	↓	↓	そよ風	羽ばたき		鳥(2)・羽ばたき(2)
	体操	黄色	春の暖かな日	↓		↓	↓		自転車	鳥(2)	
	雨宿り	青	梅雨をイメージして	カエル	カエル②	カエル	カエル②	雨	カエル	雨(11)・カエル(2)	
夏	暑い①	濃い緑	ギラギラの夏		セミ					セミ(13)	セミ(2)
	暑い②	↓		船	↓	船				↓	↓
	ぐったり	↓									
	風の始まり	グレーor紫						稲妻			
秋	嵐	↓	激しい風や雨	(花火準備)	(花火準備)	葉擦れ		稲妻		(花火準備) 雨(11)	葉擦れ(2)、枝折れ(2)
	花火	紺		ロケット	ロケット	破裂	花火①	花火②	ロケット		
	落ち葉	赤				葉擦れ		枯れ葉	葉擦れ		
	落ち葉を集める	↓						落ち葉			
冬	焚火	オレンジ						焚火			
	焼き芋	茶色						焼き芋			
	月見	紺(月)		ススキ	ススキ	ススキ	ススキ	ススキ	ススキ	ススキ(6)・鈴虫(7)	
	冬支度	薄い水色	雪が降ってくる	渡り鳥		渡り鳥					
春	家を探す	↓	なかなか入れてくれない	足音	フクロウ			ノック	ドア		ふくろう(4)
	家の中でぬくぬく	薄いオレンジ	外では初詣	鍋	本坪鈴	鍋					
	冬眠	暗めの色									
	寝ている	↓				鳥	鳥				
春	起きる	ピンク		羽ばたき	そよ風	↓	↓	そよ風	羽ばたき		鳥(2)・羽ばたき(2)
	春の喜び	↓		↓	↓	↓	↓	↓	↓	鳥(2)	↓
	ハイヒールを履く	鮮やかな緑		↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓
	出発	↓									

ダンス:大塚 ピアノ:千々岩



ステージには2年生、会場の1階席、2階席には1年生を配置。

客席、会場全体を音で包み込むように配置した。



【2年生レポートと感想】

◆遊びと表現発表会（Mクラス）「四季音～Sounds of Four Seasons～」を振り返ってみると、初めの頃は、身近なもので音を創り四季を表わすのは、簡単だと思っていた。

そのような中で、各季節の印象に残る音を挙げていったが、一人ひとり春夏秋冬でイメージする音が違い、私が思い浮かばなかった音も出てきた為、考えの幅が広がって、考えるのが面白かった。

そして、2人組になり春夏秋冬に分かれた。私は、冬担当だった。

冬の音としては、雪、引き戸、鍋の音、除夜の鐘、ワタリドリなどが出た。

しかし、除夜の鐘の音を表わすのが困難だった。その際に、身近なものを使って表すことは思っていたよりも難しいと感じた。

私達が、普段何気なく聞いている音を、自ら作ることで発見を感じる事があった。

1つ目に、レインスティックだ。

紙の芯とつまようじ、ビーズや大豆を使って雨の音を表せることは、初めて知った。

またレインスティックの作り方は、思ったより簡単だった。

保育の現場でも、子ども達が、自分でレインスティックを作り、劇などの行事で活用できるのではないかと思った。

2つ目に、鳥の鳴き声（バードコール）だ。

木とボルトを使い、その摩擦で鳥の鳴き声になることも初めて知った。

作る際は、音になるまでボルトをねじるので、根気がいると感じた。その為、子ども1人で作るのは、難しいと思った。だが、親子で作ることでコミュニケーションもとれるので良いなと思った。

そして、私自身「四季音～Sounds of Four Seasons～」の中で1番好きだった場面は、花火が上がる場面だ。

練習の時は、どのような風船が1番花火のように感じるのか色々な風船も試した。すると、ジェット風船が花火の音のようになった。

音を鳴らすものが決まっても、音を鳴らすタイミングも大切で、より本物の花火を想像できるように工夫した。

当日、緊張していたが仲間がいたからこそ安心して行うことができた。

改めて、遊びと表現発表会を通して仲間が居ることの大切さを感じると共に、このメンバーで行うことができ良かった。

<飯田 いつみ>



◆Mクラスでは『四季音～Sounds of for seasons～』をテーマとして、日本の四季を、身近なものを使って作った音と1人の創作ダンスで表現した。

企画作成にあたって、初めにどのような発表をするかを考え、テーマを決めた。クラスで話し合い、どのような目的を持って発表を行うか考えた。このテーマ決めの際には、私はなかなか意見を出すことが出来なかったが、クラスメイトの良い意見に全体が賛同し、四季の音を身近なものを使って作り、表現することが決定した。

その後、決まったテーマをどのように発表としてつくりあげていくかを考えると共に、身近なものから作れる音を考え始めた。全体でイメージを固めて、なんの音を作るのか決めた上で作業にはいることになり、私は友人と2人で、シナリオを考えることになった。私は動物の中で猫が一番好きのため、猫が巡る四季を想像しながら考えて行った。友人の意見は素敵なものが多く、一緒に考えるのはとても勉強になった。



音作りでは、春夏秋冬の4つで分担をして少しずつ音を作っていた。私は冬を担当した。制作の中で、自分が想像している音と実際に鳴らしてみた音ではなかなか、本当の音に近づかないことが多かった。しかし、色々なもので試して、ダメだったら違うものでやるなど、試行錯誤しながら考え出したものは、本物の音がよく再現出来ていたように思う。そのため、完成して皆に聞いて貰って「いいね。」と感想を聞いた時はとても嬉しい気持ちになった。保育者になった際には、子どもたちにもこ

のような経験をしてもらいたいと思った。

発表本番では、初めの説明がとても緊張した。しかし、自分たちが作ったものはとてもいい作品だと感じていたので、見てもらえることは少し楽しみだった。私は、説明の一部と音を鳴らす担当であった。練習では流れを覚えるのに時間がかかったが、本番は、自分の担当をしっかりとやり遂げることが出来たと思う。

この遊びと表現発表会を通して、同じ目的を持って一緒に考え作り上げていくことの楽しさと、完成した時の達成感を感じることが出来た。2年間一緒に学んできた友人たちとの最後の発表だったので、いい発表ができて本当に良かったと思う。

<江口 友美>



◆昨年の遊びと表現発表会は2年生の後ろをついてよくわからない状態で行っていたが、今回の遊びと表現発表会は私達が中心となって自分たちがしたいことを行っていった。何もない白紙の状態のところから、みんなで案を出しあいながら作り上げていった。ひとりひとり自分の意見をいい、自分の役割を果たしながら協力して準備を行うことができた。自分が考えた案に、他の人がもっとこうしたらいいのではないかと意見を言ってくれ、より深めることもできた。一つの案をみんなで意見を出しながら話し合うことで、もっといい案にすることができるのだと実感した。自分一人で考えるのでは限界があるが、自分以外の人の意見も取り入れることで自分の考え方も、案自体も深まるのだと感じた。

演目自体については、音を一から作り出すということから始めた。季節ごとにどのような音があるのか考え、その音を作り出すためにはどのような材料が必要か、その音に近づけるためにはどうしたらいいのか試行錯誤していった。様々な素材を集めて音を作っていく中で、この素材からはこんな音が出るのかと再発見することができたり、違う素材と素材を合わせることで違う音になることなどを発見したりして、楽しみながらつくることができた。また、私はピアノ伴奏と作った音にあわせて舞台上で身体表現を行った。その季節にあった雰囲気が出るように工夫して作った。ある程度のストーリーはあったものの、一から一人で作るというのが初めてだったので、大変だなとか、難しいなと思うところもあったが、結果的に本番楽しめたので良かったと思う。本番は、Mクラス全員が自分の持ち場で、自信を持ってそれぞれの役割を果たしていたように感じた。音の鳴らし方も何度も練習し、本番に臨んでいた。だから、本番のときはみんな輝いていた。その様子を見て、ここには脇役なんて一人もいないのだと感じた。輝き方は人それぞれ違い、だからこそひとりひとりが主役なのだと思う。遊びと表現発表会を通して、仲間とともに試行錯誤しながら作っていくことの楽しさを感じることができた。また、ひとりひとり輝ける場所は必ずあり、それは決してみんな同じではないことを学んだ。

<大塚 麻奈>



◆今回、Mクラスは「身近なもので音を創り、四季を表す」をテーマに音遊びと1人の学生による身体表現を行った。総合演習の時間に2年生で何度も話し合い、何をするかを前期から考えていた。去年の発表や練習期間などを鑑みて、ああでもない、こうでもない話し合った結果、子ども達もやってみたくなるような音遊びをしようということになった。それまでに、話し合いの中でたくさんの意見が出た。どんなことをしたいかはそれぞれ考えていて、何をするかは、なかなか決まらなかった。しかし、意見がぶつかり合う中で、「こうしたらどうかな」というのが多くあり、発表の仕方や音の変化についての幅が広がったように思えた。自分にはなかった考えや意見を他の学生から聞き、様々な考え方があって、とても刺激になった。

中間発表までは、それぞれ春夏秋冬のグループに分かれて、その季節のイメージに合った音を探した。春は、鳥の鳴き声や、羽の音、春らしいそよ風、雨の音など。夏は、波の音、セミやカエルの声、汽笛、花火など。秋は、焼き芋、落ち葉の音、ススキの音、スズムシの音など。冬は、雪を踏む音、神社の鈴、フクロウの声など。音をどうやって創るか、どうしたらその音に聞こえるか、なかなか見つからず、試行錯誤していた。季節によっては、音を表現するのが難しいものもあり、音を創るなかでなくした音もある。また、最初の企画段階では、ピアノを入れず、創った音だけで発表するようにしていた。しかし、20分という発表時間では、1人の学生がずっと踊り続けるのも大変で、創った音だけで場を持たせるのも難しいということで、ピアノ演奏も入れるようにした。ある程度の形が決まるまで、とても時間がかかった。

中間発表で、先生方のアドバイスをいただき、さらに発表の幅が広がったように感じた。また、他のクラスの間発表を見てとても刺激を受けた。その後本番に向けて、音の創作、発表の仕方など話し合うと同時に資料作成をしたり、1年生との合同練習を行ったりした。

講堂や体育館での練習では、本番1、2週間前からだったので1年生と合わせるの、一度に覚えてもらうことが多く、大変だったのではないと思う。前日リハーサルにも、変更点があり、2年生で話し合い、よりよい発表にするためにMクラス一同頑張ったと思う。

本番では、それまでに作り上げてきたものをすべて出し切り、素敵な発表になったのではないと思う。

今回の遊びと表現発表会を通して大変だったことも多かったが、その分やりがいもあり、得られたものが多かった。クラス内で協力することはもちろんのこと、教材研究の大切さ、発表の場での話し方や伝え方などとても勉強になった。

<小西 彩香>



◆2年生になり、大谷短期大学の行事の中で卒業発表にも考えられる遊びと表現発表会の出し物の案をクラスの中で出しあうことから始まった。ねらいが達成出来る為にどんな工夫をするか、準備に必要なものは何か、1年生にはどのように動いてもらうのか、練習時間はどうするのか等、決めることはたくさんあり、自分達だけで全て決めるのはとても大変だった。しかしこれらのことを経験することで行事を一から計画する力が身に付いたと感じる。また遊びと表現発表会の全体を振り返り、発表会の前と比べてクラスの仲が深まったようにも感じた。遊びと表現発表会の話し合いで一緒にいることが多く、練習を通して発表を良いものにしようという団結力等も自然と生まれ、仲が深まったのではないかなと思う。そして、鳴り物の役割分担で3人ずつに分けたことも仲が深まることに関係したのではないかなと思う。そのことから少人数で協力するというのは自然と距離が近くなるのだと学び、少人数で活動する良い点悪い点、また、多人数で活動をする良い点悪い点を考え、保育者となった際にこれらのことを考え活用しながら保育をする重要性を学ぶことが出来た。今年の発表を人数面で振り返るとMクラスは2年生だけで考えると少人数だが、1年生を含めると多人数になり、良いバランスがとれていたのではないかなと考えた。話し合いや方向性を決めるのは少人数が良く実際にする時は多人数の方が迫力があって良いのかなと感じた。少人数で活動するのは時間短縮や仲が深まりやすい等の良い点があり、悪い点としてたくさんの意見が聞けず、視野が狭くなりやすい等があると学んだ。多人数での活動の良い点は活動の幅が広がり、たくさんの意見から視野が広がる等があり、悪い点として気持ちが一つにまとまりづらかったり、話し合いや練習にはとても時間がかかってしまったりする等があると学んだ。



発表でのねらいを振り返ると、ねらいとしていた「見ている子どもが自分もしてみたいと感じる」というのは達成できていたのではないかなと感じた。バードコールやレインスティック等の鳴り物は、身近な物で作ることが出来て、大人の少しの手伝いで実際に作ることも出来、「子どもの鳴らしてみたい、作ってみたい」という意欲に繋がったのではないかなと思う。

私はこの発表を通して、実際にする人が楽しむことが何よりも重要だということを知った。私は、自分が発案者だったということもあり、したかったことが出来て意欲的に取り組むことが出来た。また、



季節の音を考え、鳴らすのがとても楽しかったのもあり発表を楽しめた。他の皆も、最初は乗り気ではなかった人も本番が近づくとつれて、こうした方が良いのではないかなと、音の出し方を工夫していて本番は楽しめたのではないかなと思う。発表は確かに観客のことを考えなければいけないと思うが何より大切なのは、発表する人が楽しむことだと学んだ。

<白仁田 麻希>

◆遊びと表現発表でMクラスは身近な物で音を作り、身体表現で四季を表した。身近な物で音を作るのは難しかった。でもジェット風船とビー玉、風船、ダンボールで花火の音になったり、木にボルトを刺して動かすと鳥のさえずりに聞こえたりなど、こんな物で鳥のさえずりに聞こえるのだと感じたり、クラスのみんたと音探しをしながら、音がなかったらインターネットで作り方などを探して試行錯誤しながら身近な物で音を作った。音が見つかるみんな嬉しかった。講堂で練習すると、教室では聞こえていた音が講堂では聞こえないということがあった。講堂で音が聞こえるには、複数の人が音を出すことで講堂に音が聞こえた。私は教室では聞こえる音でも講堂では音が聞こえないということを学んだ。またレインスティックを作る際、雨と波の音を分ける為、大雨はレインスティックに大豆を入れて、波はビーズ、ペレットを入れた。そのレインスティックを1年生が観客席の後ろでレインスティックを回しながら動くことで梅雨のシーン、嵐のシーンでより一層雨が降ったりなど工夫をたくさんした。またお客さんにも参加してもらい、カエルとセミを鳴らす際、一体感が生まれた感じがした。身体表現も取り入れていたので合わせるのが難しかったが、練習を積み重ねていくとタイミングも合ってきた。本番では、練習では1発で鳴らないペットボトルが1発で鳴ったのが本当によかったと思った。身近な物を使って自分達で音を見つける楽しさを知ることが出来たし、友達や家族と一緒に音を見つけて共感を感じてもらうことが大事だと思った。また音を聞いて自分で季節を想像する力が豊かになるということも学んだ。本番を終わって発表を見た人達が「凄かったよ」と言ってくれたのがとても嬉しかったし、自分も終わったら達成感があった。クラスのメンバーで発表が出来て良かったと思った。自分でも身近な物で音を作って鳴らして見たいとおもった。

<田中 怜奈>



◆私は、遊びと表現発表会の取り組みを通して、多くのことを経験し学んだ。

保育現場ではねらいをもって臨み、それを達成するためにどのようにしたら良いかと考えることは保育者にとって大切なことである。これまでの実習で、ねらいを立てて臨むことの大切さを学んだため、今回の発表でもまずはねらいを立てることから始めた。ねらいを立てることで、それを達成するためにどのような仕掛けを作れば良いかと考えたり、進め方に迷った時は、ねらいを再度意識したりすることで再び前に進めていくことができた。また、ねらいをもって取り組むことで、自分たちがやりたいことだけで進めていくのではなく、何のためにするのかを意識しながら進めていくことができた。この経験を通し、保育の現場においてねらいを立てることは、子どもたちのためだけではなく、保育者にとっても保育展開の指針をつくる大切なことだと改めて思った。

今回の発表では、身近なもので創る音で季節を感じてもらうことを目標としていたが、その音づくりには非常に苦戦した。本物の音が、どのように鳴っているのかを観察し、何をどのように使ったら再現できるかと考える作業は、とても時間のかかるものだった。この音づくりの期間は、日常の様々な音に興味を持ち、どのような仕組みで音が鳴っているのかに関心をもって過ごした。似たような音を探しては、そこから音づくりに展開できないかと、日頃の生活音に注意深くなった。このことから、観察することや様々なものに関心を持つことが保育教材を理解する上でも大切だと学んだ。

また、ようやくできた音も、鳴らす位置でより本物の音に近づくということも今回の発表の中で気づくことができた。例えば、鳥のさえずりなどは、自分の耳より低い位置から聞こえてくるよりも、頭上などの上の位置から聞こえるほうが木にとまった鳥のさえずりのように聞こえたとし、雨の音についても、会場のあらゆるところから聞こえることで雨の中にいるような感覚になった。当たり前のことではあるが、自然の中で聞こえる音は、平面で鳴っているのではなく、空間の中で音が鳴っているのだということに改めて気づいた。

さらに今回は、作曲した曲をピアノで奏でることに挑戦した。めぐりゆく季節を表すために、場面ごとに曲調を変えてみたが、あまりメロディックになるとせっかく作った鳴り物の音を邪魔してしまうため、ダンスの構成を参考にしながら、できるだけ簡素化した曲をリズムやテンポ、音の強弱で表現するよう心がけた。中間発表の際、ピアノと他の音のバランスの悪さを指摘され、音を弱める工夫もした。ただ弱く弾くだけでなく、音を減らすことも弱められる要素になるとの助言を受け、直前まで編曲しながら調整していった。今回のように場面をイメージしながら作曲したのは初めての経験だったが、音楽表現技術の授業で学んできたことを活かし、作曲することができたと思う。

今回の発表では、自然の中にある音を身近なものを使って創り出すことだけでなく、創作ダンスで表現したり、オリジナルのストーリー（あらすじ）を考えたり、作曲したりと、全てが何もないところから創り上げていく作業だった。何もないところから創っていく過程は大変であったが、それぞれの学生の特技を生かして楽しみながら創っていくことができたと思う。

このように、身近なものを使って自然の中にある音を創ることは、今後の保育の現場でも役立つ保育教材になると思う。また、みんなで話し合い、協力しながらひとつのものを創り上げていく過程では、保育現場においても必要な話し合いの仕方、協力の仕方、協調性を持つことなどたくさんのスキルと大切なことを学べたと思う。

この2年間で学んだことを活かしながら考えていった今回の発表は、学びの集大成と言っても過言ではない。2年生だけではとても表現できなかった内容であるが、少ない時間で1年生にも協力してもらい、素晴らしい発表をすることができた。

2年間で共に学んだ M クラスの仲間で、このような素晴らしい発表ができたことに心から感謝し、また発表までを静かに見守ってくださった岡田先生、助言をいただいた幼児教育学科の先生方に感謝いたします。ありがとうございました。

<千々岩 樹里>



◆二年生になったので、今年は遊びと表現発表会に去年よりも多く関わった。計画を立て始めたのは前期が終わる頃で、まだ時間はあるはずだけど、それくらい丁寧に仕上げていくのだなと少し緊張したことを覚えている。最初は、遊びと表現発表会で何をしたいか、何を子どもたちに伝えたいかなど、意見を出し、みんな考えをまとめていった。改めて、誰かと意見を合わせることに難しいと感じたけど、お互いの考えを聞いたりすることは楽しいとも感じた。内容が決まると



すぐに準備を始め、みんなの意見を聞きながら少しずつ道具を準備していったと思う。音が鳴る道具を考えたり作ったりしたが、実際にやってみて音が鳴って、みんなが喜んでいる時はとても嬉しかった。実際にステージに立ってどのような動きをするかを決めながら練習している時は少し焦った雰囲気にも感じたけど、最後まで練習をきちんと出来たのは遊びと表現委員のクラスメイトが「こうしよう。」という意見をたくさん出してくれたからだと思ふ。乗り気でない時などダラダラしてしまって迷惑をかけたこともあったが、最後まで引っ張ってくれて私もやり通すことが出来た。本番に近づくと、一年生にも役割を伝え、教えていった。一年生は幕間の練習も必要な中、二年生の指示を聞いて頑張ってくれて、一緒に発表ができてとても嬉しかった。余裕がなくてきつい伝え方になったりしたこともあったかもしれないので、それは私の反省点だなと感じた。本番は、私はとても緊張した。道具の説明をする時に声を大きくしようと直前まで考えていたのに、いざ幕が上がると頭が真っ白になって、声の大きさどころかセリフまで飛びそうになってしまった。ずっと緊張していたけど、途中で頭を左右に傾けて揺れる場面があり、みんなの様子を見る余裕が少しできたことで、最後は笑顔で終わることが出来た。最後まで一つ一つ丁寧にこなすクラスみんながとても誇らしいと感じた。

遊びと表現発表会を通して、保育者を目指す者として学んだことが二つあった。まず一つ目は、話し合って意見を合わせることにの難しさや大切さである。話し合っている時はなかなか伝わらなかったりして難しいと感じるけれど、伝わって、徐々に良いものになっていると分かった時は、やっぱり話し合うことは大切だなと感じた。より良い保育を展開するために、保育者間で話し合い、良いものを組み合わせることが大切なのだと分かった。次に二つ目は、自分の考えや思いを相手に伝えることにの難しさや大切さである。一年生に指示を出す時、一方的に言ってしまったことがあった。それでは指示が分かりづらいし、練習しづらくなると気づき、次の指示からは一年生に伝わっているかできるだけ確認するようにした。伝わってないようであれば、言葉を変えたりして伝えた。保育現場でも、指示ではなくても誰かに何かを伝える場面はたくさんあると思う。自分の伝えたいことを一方的に口にするのではなく、



相手に伝わったかどうか、どのような言葉がその相手に最も伝わりやすいかなども考えながら伝えられるようにしたいと思った。遊びと表現発表会を通して感じたことを忘れないように、子どもたちや先生方、保護者の方と向き合えるようにしたい。

<野田 彩夏>

【1年生感想】(順不同)

◆私が注目したのは、四季の音を表現した「身近なもの」である。いつか私が現場で子どもと一緒に使ってみたり、作ったりしたら、楽しいだろうなと思った。しかも、作り方が難しいものはプリントまで用意(子どものためだとは思いますが)されており、実践してみたいと思える内容だった。

＜小坂 大悟＞

◆四季の音を、身近なもので表現していてとても凄かった。1からつくる道具作りでは、他の人と協力する楽しさや大変さを学ぶことができた。2年生との合同練習の時に初めて見て凄い感動を覚えた。身体表現と音がいい感じに合わさっていてよかった。子ども達が楽しめるような工夫もされておりとても凄かった。今回のような身近なものっていうのはいいなと思う。また、私達の時にもこのようにいい作品を作れるよう学んでいきたい。

＜永野 佑奈＞

◆季節の音を身近なもので表現しているのがとてもすごいと思った。また、子どもたちや学生などにも手伝ってもらい劇に参加したり、ステージだけではなく周りに1年生が散らばることで講堂中に四季の音が立体的に聞こえ楽しめたりすることが分かった。

＜井手口 麻奈加＞

◆自分の身の回りにあるもので四季の音を表現するという事で、視覚で情報を得るだけではなく、聴覚でも情報を得ることができるので五感が刺激されると思った。会場に来てくださった方々にもお手伝いしてもらい、一緒に音を創り出す演出は、会場全体を生音が包み込み、音の世界観を肌で感じる事ができた。

＜松永 佑華＞

◆会場全体を巻き込む形での四季の表現、素敵だったと思う。実際、手に取って自分でやってみることでどんな材料でどのように作られたのか分かりやすく伝わるのでいいなと思った。また、身近な物が材料として使われているので自分で作ってみたり、それにひと工夫加えたりと作りながら楽しめるなと感じた。私達も先輩方のお手伝いをさせて頂いて、四季の表現について自分たちで工夫し、音の出し方を変えた。しっかりと表現出来たかなと思う。

＜日高 莉音＞

◆四季の音を身近な物を使って表現出来る事に驚いた。お店で物を買うより、自分や子ども達と試行錯誤する事で、コミュニケーションを取ったり子ども達も1つの遊びとして楽しめたりする事に気づき、今回学ばせて頂いた事が自分の知識習得にも繋がった。また、作り方等を知る事で将来子ども達と接する際にも教える事が出来、良き思い出にもなると思った。また、先輩方がピアノと合わせながら沢山の物を使って表現されていたところを見て、実際に四季の変化を感じる事が出来たし、見ていて色々な事を学ばせて頂いた。今回先輩方のお手伝いをさせて頂いて本当に楽しかった！

＜石橋 美咲＞

◆四季の音を身近なもので表していてすごいなと思った。鳴らし方や、どのようなもので作っているかを前で表したり、パンフレットに書いたりすることで鳴らし方が分かりやすかった。お客さん参加型ですることで実際に鳴らせてお客さんもとても楽しそうだった。

＜山下 絢女＞

◆日本の四季に関係する音を、新聞紙やビーズ等の身近なものを組み合わせる事で表現されており、とても凄いなと思った。また先輩方は、ステージ上だけでなく会場全体を発表に活用したり、楽器の作り方が書かれたプリントを配布したりするなど様々な工夫をされていて、非常に勉強になった。

＜井手 千夏子＞

◆季節の音を身近なもので音を出し表現していることが凄いなと思った。最初に音の鳴らし方やどのよう

な音か説明があったのはわかりやすいなと思った。会場を暗くして四季を表現しやすいようにしている事や、会場にいる方と一緒に音を出して楽しむ事に魅力を感じた。
＜宮田 桃華＞

◆手作りの季節の音を四季に合わせて使い分けてあり面白いなと思った。音を鳴らす時の力の入れ具合で強弱がつけられ、より本物に近くなる音ができ聴いても実際にしても楽しかった。会場全体で作った作品だったと思った。
＜西口 桃子＞

◆春夏秋冬の4つの季節を身近な物を使って表現が出来る事を知った。道具も簡単に揃える事が出来る物が多く、会場の人と一緒にする事で、家でも作って遊んでみたいと思えるような感じになった。なので、作り方のパンフレットを用意し入口に置く事は良い方法と思った。また、会場全体を使い立体的に音が出来ていてとても素晴らしかった。小道具では少し遊び方や作り方に工夫する事で様々な音を出すことができ、凄いなと思いつつ、カエルの音を出す小道具はとても楽しいと思えた。今回の四季音を表現していく事で様々な事が学べた。
＜中井 遼海＞

◆季節の音を身近な物で作って四季折々の音を表現していて凄いなと思った。また、カエルとセミの音をだす小道具をお客さんに体験してもらい一緒に鳴らしていただくなど、お客さんも一緒に楽しむことができ良かったと思った。
＜小野 綾香＞

◆身近に使っているもので春夏秋冬の虫の音や自然の音などを作れることを知り、こんなものでこういうものが作れるのだなと感心した。実際に私達も道具を作ったり、使ったりして参加することで大変さも学んだ。これらの事を活かして来年もいい作品が作れるように頑張りたい。
＜大隈 彩花＞

◆実際に身近な物を使って四季を表してみても、どうすれば良い音ができるか色々試したり、楽しみながら取り組めたりした。周りのお客さんも参加出来て、一緒に楽しめる作品だったと思った。また音だけで、四季が表せるのは凄いなと思った。強弱を付けることで表現の仕方が色々変わるのだと思った。とても楽しく取り組めた。
＜本田 玲奈＞

◆四季に合わせて音になるものを身近にあるもので作れるように工夫されていて、割り箸と紐などを使って動物の鳴き声のように聞こえることも学べた。また、お客さんも参加できるように工夫されていたので、見ている方も楽しかったのではないかなと思った。来年の発表会をするにあたってとても良い学びになった。
＜川崎 歓花＞

◆自然の音を身近にあるものを使って表していたのでこの道具でこんな音が出るのかととても感動したのと学ぶことが出来た。特にカエルの小道具を早く回すとセミの音になるのがとても工夫されていると思った。また四季を感じられたのでとても良かったと思った。楽しかった。
＜片山 ありさ＞

◆自分たちが発表してお客さん達が聞くだけではなく、共同作業としてお客さんにも実際に音を鳴らす事を体験して、私達と一緒にこの場で自然の音を奏でていることを楽しむ、その発想がすごいなと思った。この春夏秋冬のそれぞれの季節の音でこんなに当たり前だった音がこんなに心地よい音だったのだなと、長く聞いていられるほど綺麗な音だった。その発表に少しでも携わったことにとっても嬉しく思った。

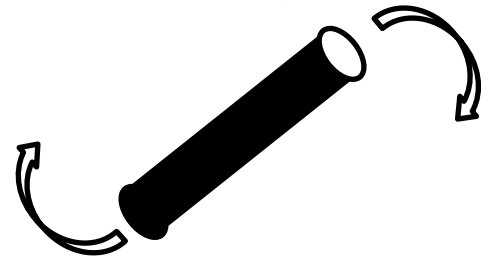
＜西田 望美＞



レインスティック (雨や波の音が作れるよ)

【材料・必要なもの】

- ①ラップなどの芯 (紙芯)
- ②つまようじ
- ③ビーズか小豆や大豆などの豆
- ④おりがみ
- ⑤キリ
- ⑥ボンド
- ⑦ペンチ

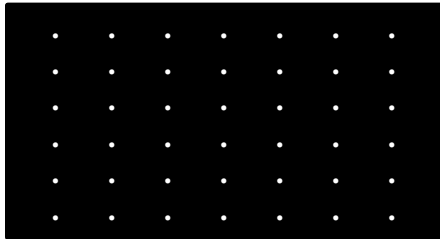


【作り方】

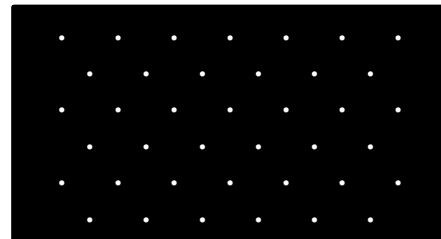
- ①紙芯にキリでつまようじが通るくらいの穴をあける (向こう側まであけなくてよい)

※図1のようにすると豆がつまようじに当たりにくくなるので、図2のようにバラバラにあける

(図1)

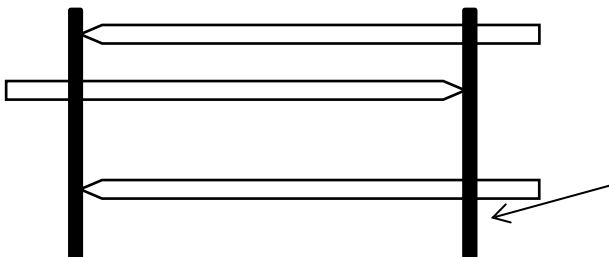


(図2)



※つまようじとつまようじの間の大きさの違いで鳴り方が変わるよ

- ②穴につまようじを通す



- ③穴が大きすぎるとつまようじが抜けるのでAの部分にボンドを付けて固める
- ④穴から出ている余分なつまようじ (Aの部分) をペンチで切り取る
- ⑤片方の穴を折り紙でふさぐ
- ⑥ビーズか小豆や大豆などの豆を紙芯に入れる
- ⑦もう片方の穴をふさぐ



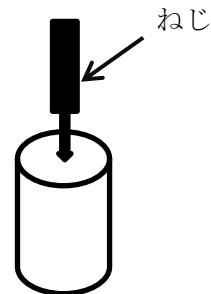
バードコール (鳥の鳴き声ができるよ)

【材料・必要なもの】

- ①太さのある木 (直径3センチメートル以上)
- ②先のとがっていないボルト
- ③ボルトより少し細いねじ

【作り方】

- ①木に、ねじで穴をあける
 - ②穴にボルトを回しながら入れて、音の鳴るところを探す
- ※木の種類やねじの大きさに音も変わるよ。

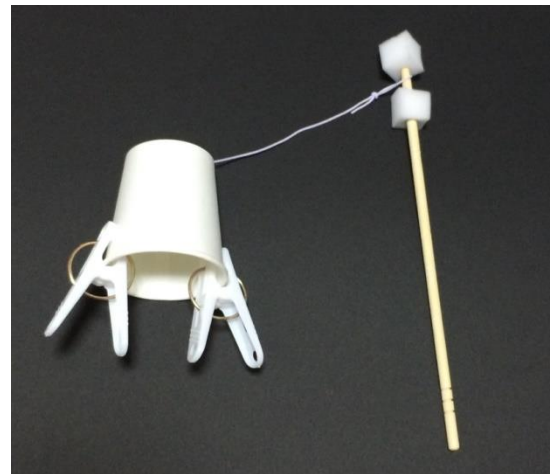


鳴り物おもちゃの作り方

なんの声に聞こえるかな？

【材料・必要なもの】

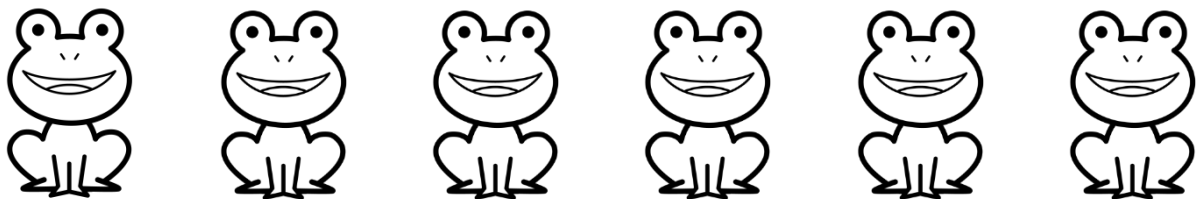
- ・紙コップ (サイズで鳴り方が変わるよ)
- ・割りばし 1本 (丸いものか丸くする)
- ・リリアン糸もしくはタコ糸 30cm くらい
- ・スポンジ
- ・ペットボトル
- ・洗濯ばさみ (おもりがいるときに使うよ)
- ・ボンド (ゴム製のもの※なくてもできるよ)
- ・目打ちかキリ
- ・ハサミ
- ・毛抜きかピンセット



【作り方】

- ①スポンジを1.5cm~2cmの大きさに切ったものを2つ用意する
- ②切ったスポンジの真ん中にキリ等で穴をあけ、割りばしをまわしながら、先から5cm くらいのところまで通す

- ③割りばしの先にボンドを塗り、乾かす（ボンドを塗らないときは、糸を濡らすと音が鳴るよ）
- ④紙コップの底にキリ等で糸が通るくらいの穴をあける。（※穴が大きすぎると音が鳴らないよ）
- ⑤穴に糸を通し、反対側からピンセット等で糸を引き抜く
- ⑥ペットボトルを切って、1 cm×2 cmくらいのプレートを2枚作る（大きさは適当でいいよ）
- ⑦プレートにキリ等で穴をあけて、紙コップの内側に通っている糸を通し結ぶ
- ⑧紙コップの底側の糸の先に1.5 cmくらいの輪を作る
- ⑨③のボンドの部分が乾いたら、糸がくっつきすぎないように、指で触って粘着力を弱める
- ⑩⑧の輪を割りばしのボンドの部分に通す
- ⑪スポンジの真ん中に穴をあけ、ボンドを穴の中に少しつけ、割りばしの先を通す
- ⑫割りばしを回してみても、紙コップが軽くて上手く回らないときは、洗濯ばさみを紙コップにつけてみる



糸の素材を変えたり、紙コップの大きさを変えたりすると、鳴き声も変わるよ。いろいろ試してみてね♪